

注解『七十一番職人歌合』稿(十三)

下 房 俊 一

凡 例

一、本稿には、『七十一番職人歌合』の中、第二十九番および第三十番の注解を収めた。

二十九番 杳造 鞠括

【職人尽】

〔吾吟我集〕 寄鞠恋 下手の鞠よ当てども知れず庭中に落とし文する恋のはかなさ / 杳 名を付けて牡丹といへるくくりこそげにもなりけりししの革杳 / 鞠 暮れかかり鞠のにはかに吹き出づる風を恨みの葛袴哉 〔古今夷曲集〕 鞠 昨日過ぎ今日暮れよくて飛鳥井のながしの曲も始まりの場久清 / 〔長崎一見 職人一首〕 十二番左 杳屋 来て見よと踏み付けられて杳屋迄くつうながらも花を見るもの 左の哥の句、きうくつらしき有様……持にやもあらん。 〔後撰夷曲集〕 寄鞠恋 蹴る鞠といとしき君の御姿は見上げ見下るす斗にて候久清 / 鞠 老ひぬれば衣紋流しもありといへばいよいよまくほしき鞠かな宣堅 / 曲しそこなひて 恋路では御ざらぬけれど我が鞠の落ちてうき名を流す曲なさ行広 / 鞠場 鞠の場は七間まなか四方也木と木の隔て二丈六尺藤原雅康卿 / 〔大団〕 蹴鞠 蹴上げぬる鞠のかはゆくなるままにこまよこいこい恋とこそなれ 〔人倫訓蒙図彙〕 鞠 上古、天竺に曇王といふ大外道あり。盤古大王の太子、是を射殺して

頭かぶをはね、其の首を鞆たもとと名付けて、八人の童子に蹴くさしむ。是始め也。日本におゐては、用明天皇の御時より生まれり。公家のもてあそびとして、さまざまの法あり。其の伝を継げる家を、飛鳥井、御子左といふ。又、賀茂の神官松下、一家一流の伝あり。冠の掛緒かけなは、鞆の家飛鳥井より印いんを得て掛けらるるゆへ、諸家残らず此の家の門弟なり。装束の高下、桔梗袴、紫未濃むすも等の印あり。懸かりは、松、楓、柳、桜。懸かりの造り様は、横箒よこはら、堅箒かたはらの分かちあり。木をもつて懸かりを造る事は、他家には許さず。鞆師は、新町通六角下ル丁竹之屋左近、室町通四条下ル丁竹庵、丸太町烏丸矢野常之、二条通富小路植虎屋広昌。大坂は道修谷。江戸、京橋南式丁目亀屋六左衛門、石町十間棚松屋又左衛門、同所竹屋勘兵衛、浅草かや町。〔狂詠犬百人一首〕中納言ひらおもて 立ち別る鞆場のあちの隅に生ふる松とし聞けば沓の音とん 〔誹諧職人尽〕沓作り 夕暮は沓に踏く乙鳥かな風瀑 初雪やみなやことなき沓の音山川 夕顔や沓かへ宿の枕にも大町 五月雨や沓の直上げる間の宿永我 沓作り紛れてつかむ尾花かな嘉橋 鞆ほどの鮫鱈を沓となぶる也大町 鞆くくり 鞆子にて 沓音も静かにかざす桜哉荷兮 吹く息は鳩呼ぶ秋歎鞆括臙舟 永き日を括り寄りてや鞆の音沼津駅 同波 七夕の日を誰がはれぞ鞆括り道淡 年の暮数ありやありや鞆括り寥和 〔今様職人尽百人一首〕まり屋 雨皮に風の破れたる繕ひは直しもやらで採み入れの鞆 「飛鳥井殿の方は違ふたかな。さればおらをきかぬ」 〔彩画職人部類〕鞆 鞆は黄帝作らしめたまふと。本朝へは皇極天皇の時、初めて渡る。女帝なれば、是を翫びたまはず。文武帝大宝元年、初めて蹴鞆あり。相統きて後鳥羽院、是を賞し給ふ。飛鳥井中将雅経郷、此の道に達したまひ、世々蹴鞆の師祖とす。庶流分かれて、難波家あり。両家をもつて世に鳴る所なり。夫木集に、慈円 花のもとにかけてかずそふ鞆の音のなづまぬほどに雨そそくなり 〔職人尽発句合〕三十一番左 鞆くくり 開いては逢ひ合ふ鞆や星の暮 七夕の鞆の式を、星の恋に結び合はせしや。何がし殿の家の名譽も思ひ寄せて艶なれ。……鞆の弾みも亦おもしろし。 五十二番左 沓師 鴈門に沓音高し冬の月 鴈門高き月影に冴えわたれる沓音は、阿房宮に李斯が戒めを示せしありさまも思ひ合はされぬべし。……月も雪〔冠師の歌〕もいと興あり。 〔職人狂歌合〕鞆くくり 括り寄せし鞆に見まがふ望月の影のみ白く空にありあり ……右、鞆子川沓の音高く、と古くも詠みたれば、めづらしげなくや。左、またき勝にて侍り。 鞆くくり 晴れわたるきりの箱より出でしかも手わざの鞆とめづる月影 ……右、きりの秀句よろし。されど、勝は左とこそ定め侍るべけれ。 鞆くくり 括り出す鞆もさ山

のはつみななる月にはそれとけおされて見ゆ 左、けおされての詞、おかし。但し、さ山をしも取り出でられしは、鞠に寄せあ
る名なるにや。右、…可為勝。／ 鞠造 鞠造り御用も今宵あすかると延ばせ月見の心急ぎに ……右、あすかるの秀句
のみにて、させる事なければ、陰陽師を勝とや申すべき。／ 鞠くくり 翌の席急ぐ鞠師も味はふは梢につはいもち月の影
左、椿餅は若菜の巻に見へたり。源氏見ぬ歌よみはむげの事なりと、五条の入道こそ申されしか。末の世には狂哥よむ人に
さへ、此の文に詳しき人もありけり。…左可為勝。／ 杳造 昼かとも疑ふばかり杳造る手もて指さす瓜畑の月 左、文
選の古詩に、瓜田不納履とあるをとりて趣意とされし、おかし。疑ふといふ詞も味はひ深くや。…左右、和漢の古こと、い
づれかまさりいづれか劣り侍らん。定めがたし。〔略画職人尽〕小男鹿の皮もて括る鞠括りつまみも萩の花の紫

【本文】

廿九番

なかむとてたゝすむ庭の月影に

いさこのくつのあとともみえけり

しほかまやかはらの院のまりかたの

まろきは月をうつすなりけり

左、なかむるとみるとはおなし事にや。右、

河原院にしほかま、月をうつす心、すこし

はまさるへくや。

ぬく杳のかさなるとてもいかゝせむ

われをおもはぬひとのちきりは

毛かはりをとりあはせたる鞠かはの

おもひもあはぬ人にこひつゝ

くつのあと―〔類〕杳の跡

まりかた―〔類〕鞠かた

なりけり―〔類〕成けり

事―〔類〕こと

いかゝせむ―〔類〕いかゝせん

われをおもはぬひとのちきりは―〔類〕我を思はぬ人の契は

おもひも―〔類〕おもひも こひつゝ―〔類〕恋つゝ

左は、ぬく沓のかさなれるは、つまの外心あるしるしといふ故事を思てよめる歟。

右は、当道さる事も侍らめとも、哥からいやし。左可勝にや。

◇

鞠くゝり

なんは殿は、

大かたを御

このみある。

◇

沓つくり
まりくつは、
はたかなるは
わるきと。



沓一〔類〕くつ つま一〔類〕妻

事一〔類〕こと

〔明〕「沓つくり」「鞠くゝり」ノ順

鞠くゝり一〔白〕鞠括り〔忠〕廿九番 鞠括〔類〕鞠括

なんは殿一〔白〕〔忠〕難波との〔類〕難波殿

御このみある一〔白〕〔忠〕御好ある

沓つくり一〔白〕〔忠〕〔類〕沓造

はたかなるは一〔類〕はたかなるか

【語注】

◎沓（履）には、浅沓、深沓などがあり、広く用いられた浅沓にも、その素材によって、木製のもの、革製のものなどがあるが、ここで造っているのは、木製の浅沓であることが、絵から分かる。また、沓造が鞠括と番いにされていること、および、月の歌の「いさご」、画中の「鞠沓は」二云々の言葉から、鞠沓であることが分かる。

鞠括は、蹴鞠用の鞠を作る職人。蹴鞠用の鞠は、半球形になめした鹿などの革を、二つ縫い合わせて、中がくびれた形に作る。「括る」というのは、この縫い合わせる作業をいうのであろう。

杳造、鞠括ともに、職人歌合に初出。なお、後世の『雍州府志』には、「鞠并履、所々之ヲ製造ス。其ノ内、町口通り竹屋某ガ造ル所ヲ良トス」とあり、当時、鞠杳と鞠とは同じ業者が造っていたかと思われる。

◎庭 鞠の「庭」に通じ、「鞠」の縁語。

◎いさこのくつのおともみえけり 「いさこ」すなわち砂は、鞠の庭に敷くので「鞠」の縁語。砂の上の杳の跡も見えるほどに月が明るい、というのである。

◎しほかまや 「塩竈」は、河原院の塩竈（次項参照。「や」は、和歌の初句にしばしば用いられて、場面を提示する詠歎の助詞。

◎かはらの院 左大臣源融（弘化二二―寛平七）が賀茂川のほとりに建てた大邸宅。位置は六条坊門の南、万里小路の東、その庭は、陸奥の塩竈の浦の景を模し、海水を運んで塩を焼かせたという。融の死後、宇多上皇が住み、その後寺となって、恵慶、安法らの王孫や、能因らの歌人、文人がしばしばここに集まり、風流をこととしたが、建仁三年、再度の火災にあって荒廃した。しかし、その跡地は、『師守記』貞治三年二月二日条に、「於川原院大和田楽有之云々」、『看聞日記』応永二十七年三月二十三日条に「今日河原院有勸進田楽云々」等と見えるごとく、「河原院」と呼ばれて後世まで残り（『京都市の地名』）、また、『遊庭秘抄』中に、「洛中に河原院、又あまべとて、此の二ヶ条ならでは鞠括なし。河原院の鞠、いかにも勝り、かた穴二つある鞠也」（「鞠勢分付縫様事」の条）と見えることから、その辺りに鞠括が住んでいたことも分かる。本職人歌合成立当時においても、そうであったのであろう。

◎まりかたのまろきは月をうつすなりけり 「鞠形」は鞠の形であろう。「写す」は、かたどる意。鞠の形の丸いのは月をかたどったのであった。（当時、あるいはそのような伝承があったか。）河原院の庭は陸奥の塩竈を写したのであるが、一方、という気持ちか。「写す」に「映す」を掛け、塩竈の浦に月影が映っているイメージを重ねる。

◎なかむるとみるとはおなし事にや 「眺むる」と「見る」とは同義語でよくない、というのである。一首の中に同義語を重ねることは、同心病と呼ばれ、さまざまな歌病（歌の欠点）の中でもっとも重視され、後世まで避けるべき病とされた（和歌大辞典）。歌合には、「解くる、消ゆる、同心病歎」（六百番歌合、春上十九番申状）、「雲井と空

とは、同じじこにや侍らん」(千五百番歌合、一番判詞)などの例がある。当職人歌合にも、「甌の上と蒸し上げと、同じ文字にや」(三十七番、豆腐売・素麵売、月、判詞)、「神哥と神楽と、同じ言葉なるべし。歌合には故実なきに似たり」(六十二番、祢宜・巫、月、判詞)の例がある。

◎ぬく沓のかさなるとてもいかせむ 「脱ぐ沓の重なることの数なればるもりのしるし今はあらじな」(第三句「重なるは」とも)という古歌について、『俊頼髓脳』に、「脱ぐ沓の重なる事のと詠めるは、女のみそかごとする折に、おのづから履きたる沓の重なりて脱ぎ置かるるなり」、「奥義抄」中に、「女のみそかごとするには男の沓重なる」と云ふ事のあれば、かく詠めるなり」などとあるごとく、女が他の男と密会すると、裏切られた男の沓が重なるとする俗説があった。ここは、そのようなことがあってもどうしようもないと、相手のつれなさを嘆いているのである。

◎毛かはりをとりあはせたる鞆かはの 「鞆革」は、鞆に用いる鹿の革、「毛変はり」は、革を取る部分、季節などの違いによる、質の異なった革を言うのであろう。それを取り合わせるといふのだから、この鞆は下等の品と思われ。その鞆革がうまく合わないように「思ひも合はぬ」と、序詞的に下句に続く。

◎おもひもあはぬ人 「思ひ合ふ」は、互いに恋い慕う意であるが、通常、和歌で用いる言葉ではない。ここは、上句からの続きで、あえて俗語を用いて滑稽感を出したのである。「思ひも合はぬ」で、自分は相手を思っているのに、相手は自分を思ってくれない、片思いの状態。本職人歌合三十一番左、銀細工の恋の歌にも、「我に人とりほされじと思ひ合はねば」とある。

◎ぬく沓のかさなれるは、つまの外心あるしといふ故事 「ぬく沓のかさなるとてもいかせむ」の項で述べた俗説。「外心」は、浮気心。明暦板本は「よそこころ」と仮名を振るが、「よそこころ」は近世以降の語か。

◎当道さる事も侍らめとも 「当道」は、その道、すなわち、ここは、鞆括の世界。鞆括の世界で、毛変わりを取り合わせるといふようなこともあるのであろうが、その限りにおいて、おのれの職能をうまく詠み込んだといふべきだが、という気持ち(四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」の項参照)。

◎哥からいやし 「毛変はりを取り合はせたる鞆革」という卑俗な譬えや、「思ひ合ふ」といふ俗語を用いた点につ

いていうのであろう。もっとも、職人歌合の歌は、大概みな卑俗なものである。

◎鞠くゝり 沓つくり 底本を始め、尊経閣本、白石本、忠寄本、類従本、いずれも、絵の順序を誤っている。理由は分からない。明暦板本は、「沓つくり」「鞠くゝり」の順序に正している。なお、同様の錯誤が、四十一番、一文字売・燈心売にも見られる。

◎なんは殿は、大かたを御このみある 「なんは殿」は、蹴鞠の一派、難波流のこと。難波流は、賀茂流の祖成平の弟子、難波頼輔の孫宗長を祖とする。同じく頼輔の孫の飛鳥井雅経を祖とする飛鳥井流や、藤原為家の門流、御子左流などと並び立ったが、近世には衰えた。難波流が大型の鞠を好んで用いた事実については、未考。

◎まりくつは、はたかなるはわろきと 「はたかなるは」は、類従本「はたかなるか」。「は」の方が意味が通じやすい。類従本の誤刻であろう。「はたか」は、『中世職人語彙の研究』は、『遊庭秘抄』の「明日香井、難波両流には、聊鼻を押し侍る也」(沓事)、『和漢三才図会』の「半靴 其頭短也。……凡蹴鞠人亦著^{はな}之」などを引いて、「鼻高」の意であろう(「はたか」の項)、とする。(「鼻高」は、「びかう」とも読み、沓の先端が高く持ち上がったさま。)従うべきかと思われる。『日本職人辞典』は、「裸」と解し、「蹴鞠用の沓は、木地の上に布か革を貼るからである」(「沓造」の項)とする。「と」は、「ということだ」の意か。

【絵】

語注で述べたとおり、明暦板本を除き、絵の順序を誤っている。

鞠括は、無帽で諸肌脱ぎで袴を履く。台の上に、縄をまるめた体の物を置き、その上で鞠を造る。横に、木槌、鉤形の工具および曲物の器。これらの名称、用途など、未考。『日本職人辞典』は、「木槌と鉤は縫う時の道具、わきの曲物には皮紐をいれてあるのだらう」(「鞠括」の項)とし、『ヴィジュアル史料 日本職人史(1)』は、「曲物は麦箱で小麦が入っている。……種木ガネは小麦をつめるためのものである。小麦をつめて形を整える」(「三〇一鞠括」の項)とする。無帽であるのは、十番の馬買はう・皮買はう、三十六番右の穢多などと同様、動物やその皮を扱って

いた関係で蔑視されていたことの反映か。

杓造は、烏帽子を被り、諸肌脱ぎで袴を履く。左手に杓の片方、右手に小刀を持つ。前に、もう片方の杓と、別にいま一足。尊経閣本、忠寄本、明暦板本、類従本は、木の削り屑が散乱。

【参考】

○ 木のもとの鞠の杓音しどろにて

真砂は数もいかがとるべき

△忍誓▽

(享徳千句、五)

○ 桜がもとに多きめしうど

所司代の表は鞠の懸かりにて

(犬つくば集)

○ 小聖道こそ鞠好きをすれ

立ち出づる庭の松もと桜もと

(同)

○ 梅の木の下で、鞠をたうと蹴たれば、梅ははらりこぼれる、鞠は空に留まりた、とんと蹴上げて鞠をば上手が蹴るもの、浅葱袴で鞠ける殿御がいうし、われが殿御は鞠にわ上手なるもの

(田植草紙)

○ 殿の前の柳に、鞠がかかれかしの、通りさまに蹴ていのふ、鞠がかかれかし、お茶をまいれや、鞠蹴て喉渇くに、鞠蹴る茶碗は取らで手を取る、鞠蹴て通れ殿原

(同)

○ われらにおいては、球戯は手でおこなわれる。日本人は、これを足でする。

(日本覚書、一四)

○ 第二は足の先端で行なう球^{ベイヤ}の競技である。公家 *ogabe* と呼ばれる王国の高官たちの間で行なわれ王宮^{ベイヤ}の競技で、そこから一般大衆、さらにはこの国の宗教家である坊主 *bonzo* (*dozo*)、らにまで普及した。

(日本教会史、二巻一章)

【職人尽】

〔鶴岡放生会職人歌合〕 四番左 遊女

河瀬より影さす月のみなれさは船もなかれの波のよる／＼
われなからたのまれかたき契かなおもひきたためぬ人を恋つゝ

判云、月は……左哥、紅衣青袂、万人の往来をたのみ、船中浪上、一生の浮沈を思へは、よその心もしぬるはかりにて、勝と申侍ぬる。恋は、左の哥よしありて、とかなくは侍れと、目なれたる様にや侍らん。右の哥……頗可為勝者歟。

〔吾吟我集〕寄遊女恋 船遊びうかれ女の棹の歌聞けば四肢よふしもなへておもしろ 化粧にて人を迷はすたはれ女は狐ならねど是もつらじろ 〔古今夷曲集〕傀儡 づら白くけはへる茶屋の出女は稲荷狐の子とやいはまし△源雅純朝臣▽ 大井川流れを立てて住む宿の嶋田縮にし髪も遊君△保友▽ うかれ女の人をたらすは大磯の虎の威をかる狐なりけり△みとく▽ うかれ女のさるやちぎるや新しく小袖もつまもかはるがはるに△三哲▽ 〔訓蒙図彙〕娼婦しやうぶ うかれめ、倡伎しやうぎ、妓女ぎよな、並同。〔後撰夷曲集〕寄傀儡恋 吸い付けてくれしたばこはうかれ女を恋ひの煙の立ち初めにこそ△休昌▽ すりきりを目ききのみかは鼻もきくしやらくさいとてかてぬうかれ女△正長▽ 傾城は何にたとへん双六のさいさい変はる振り心にて△政長▽ 売られたるその身の親の氏よりも育ちがらにぞ人のうかれ女△正舎▽ うかれ女の立つ門口を行く行くも隠るる迄にかへりみし茶屋△俊佐▽ うかれ女を物にたとへば剃刀かみそり砥あふたび毎にかねを吸はるる△資之▽ たはれ女にたはれて金を負ひぬれば恋の重荷と是や申さん△みつなか▽ 思へども質の流れの君なれや銀がなければ請け出しもせず△貞林▽ 金払ふ跡より恋のせめくれば傾城やこれ煩惱の犬△行風▽ 出羽といふ傾城をよめる 稲舟のいなともいはず心よき出羽よ最上のかはゆらしやな△不得▽ 玉藻といへる傾城を見て 化粧して出づる玉藻が姿こそ買ひ手をばかす昼狐なれ△長行▽ 橋本の傾城に馴れて 恋ひこがれ胸やき鼠狐川の流れを立つるおん情故△惟次▽ 大坂佐渡嶋町を此比世に越後町といひならはせば詠める 傾城に迷へ

人は親知らず子知らずに行く越後町哉[△]宜為[△] 大津へ通ひ初めて たきつくる柴屋町なるうかれ女にうかうかよみて身が
 こそのみ[△]一忠[△] / 傀儡 傾城の煙いぶせきたばこにもすすけぬ物は兒の白粉[△]成之[△] 大坂瓢箪町にて 名にし負ふ
 瓢箪町は川竹の流れを立ててうきにうかれ女[△]正忠[△] 関にて 旅人をとどむる時の会尺には地藏兒する関の出女[△]春房[△]
 [銀葉夷歌集] 傾城をよめる 文をやり又指を切る血の泪たらし寄せつつ契るうかれ女[△]一入[△] 静といふ傾城になれて 判官
 と我をや人の沙汰すらん静に添へば心よしつね[△]政仍[△] 傾城がいとしと云ふもまことやら爪を放して見する心中[△]延治[△]
 付けざしも安傾城のたばこ社すいりやう申せいきのわるさは[△]政栄[△] 題しらず 長崎の遊女に心うつりては恥をかきぬるひ
 ぜん瘡かな[△]且心[△] 振りのよき茶屋の女を見そめつつ赤前垂れの色に出でけり[△]長舎[△] 惣嫁といへる夜発やうの者おほく
 出で来てかれに相図に夜な夜な小歌うたひありくを詠める 門近く家居しぬればあなおかし惣嫁の歌を夜な夜なに聞く[△]正世
[△] [大団] 寄遊女恋 巾着になにもなければまच्च山まつさまあれど通はざりけり / 遊女 露涙いかにつとめの身じや
 とてもあなたこなたの袖濡らすかな (人倫訓蒙図彙) 嶋原の茶屋 丹波口の茶屋、此の所は、色里に通ふおのこ、三枚肩、
 四枚肩の下に足を早め、空を飛ぶがごとくにかけり、茶屋近くなりぬれば、六尺ひとり先へ走り、茶屋の表通りざまに、誰さ
 ま御出でと伝ふれば、内より、よう御出でといふより早く、焼印の編笠持ち来たりぬ。大臣は衣紋の馬場にて駕より降り、忍
 び編笠深く被り、朱雀の野辺の細道歩み、大門に入りぬ。入口の茶屋にて又、それ様のお越しといへば、早うござりましたと
 答ふつつ、大臣の尻に付きて揚屋へ送り、門口より帰る。丹波口の茶屋は、揚屋へ入りて、其の座をしめやかにつとめ、酒な
 ど食べ、送り迎いする事をつとめとす。内の茶屋にては、はし女郎を一尺一寸にてもてなす。はし傾城の揚屋なり。夜の客は
 せぬとかや。はし局に通ふなる者は、大門口の馬場が茶屋にて、三錢五錢の価にて笠を借り、火桶やりたや炭添ゑてと、鼻哥
 うたうも又おかし。 / 嶋原 都の遊女町を嶋原といへるは、西国の嶋原の城郭、一方口なるになぞらへて、爰もかく名付
 けしにや。傾城、傾国の起こりを今改めいふはくだなり。いにしへは二条柳の馬場のほとりに四町四方に家作りせしを、其の
 後六条へ移りて、三筋町といひて時めきけれ共、猶都の町近ければとて、今の朱雀に移る。昔は揚げ錢も五三天神とて、五十
 三匁、式十五匁なりしを、いつの比よりか五十八匁、三十匁、十四匁になりぬ。大夫には引舟とて囲女房一人召し連れらるは、
 軽忽な事に思へども、色好みの若人は、鬼の煎餅食ふよりいとやすく思ひて通ふとなり。色好まざらん男はよけれと、水法師

のいいしもさる事ぞかしとは思へ共、辻風と傾城にはあわぬが秘密とかや。／久津輪 傾城屋の亭主をくつわといふは、出所いまだ不考。ある人のいふは、駒を乗り入るをば、まづ轡をはまずを最初とす。これ乗り馬を仕立つる第一なり。此のごとくあまたの女子を抱へ置き、それぞれに仕立つるは、傾城屋のわざなり。されば、東西も知らぬ女子、親の手を離れ、此のうきふしのわざは、牧おろしの駒のごとくなるによりいふとかや。／揚屋 女郎諸分の会所なり。亭主、客への挨拶愛敬あれば、買手もそれぞれに露を打つなり。されば無欲なるをよとす。／傾城 太夫、天神、鹿恋、半弥、横町都鄙の者此の所へ奉公に出すなり。年の定めは、出で入りの年はのけて、つとめ十年ときわめて、傾城の習いにて、つとめの内に身上がりすれば、その揚げ銭、親方の借金とつもり、年季明きて此の金を立てねば出ださぬなり。つとめのうち、衣装と朝夕の食物こそは親方より出だせ、その他は皆自分賄ひなり。世に苦しまわざはまたと類なかるべし。あわれむべし、／。〔和国百女〕上方より初めて下りし奉公人、ふるさとは男だての色好みと呼ばれしほどの器量よし、座はいも少し世語言葉をも覚へたり。いざや聞き及びにし山谷、新吉原を見物せんとて、うち連れたち行きけるに、これこそ吉原とて、大門口にさしかかり、郭の内に入りて見れば、時めく花の上ろうの、禿遣手を引き連れて、床几に腰うちかけて居けるに、かのぶうぶう、さてこそと思ひ、御名をたれさまと問へば、遣手聞きて、初心者と思ひ、佐野の源左衛門と答へければ、かのぶうぶう、これを聞きて、さては名にのみ触れし常世様にてましますかと言ふた。／五月の節句を約束してお敵を待ちし上ろう、床几に腰うちかけて、新造に向かひていへるは、今日のお客はこちの客の連れにて、よき若衆様じや、思ふさまに馳走して帰しやれとといふうちに、二人連れだち、大尽の風俗にて歩みを運ぶ。上ろう見つけて、さてさて遅しと、まづ内の首尾、御心もなしと問へば、過ぎし比の帰るさ、二挺立に乗り後れて、さんくく。〔狂詠犬百人一首〕女郎てんじん はり過ぎてなぐれにけらし白服に衣着てふ尼のなりさま。／傾城太夫 薫物は奈良の土産の八重一重けふ愛許に匂ひぬるかな。〔百人女郎品定〕三ヶ津色里の始 世に傾国傾城などと、憎体口のやうに言ひなせども、源深く理義はあまねく知る所、天竺震旦我が朝とてもさら也。殊更吾が国は、天神地祇より、神風の道にみちたる国の風情、大いに和らぐ日の本の風俗とかや。されば、京江戸大坂三ヶの津を此の道の上品と定むるも、故あることぞかし。第一、京嶋原は、天正のそのかみ、原三郎左衛門、林又市郎といふ浪人に許命せられて、即ち柳馬場二条の北に傾城町を開きし。後に六条西洞院の東に移され、それよりはるか後、

寛永年中に、今の朱雀野に所を易へられしが、昔の因みをもつて、今に西新屋敷柳町と言ひ伝ふるなり。その時の原氏は、今の島原上の町西南角、桔梗屋八右衛門が祖也。又、林氏は、今の下の町西南角、藤屋八郎左衛門屋敷、その跡也。林氏は、寛永年中に大坂に引越す。今の大坂新町扇屋、是なり。江戸は、そのかみ、太田氏、彼の土地を開かれし砌に、御赦免にて何某多かりしが、別けて山下氏など、此の道の祖也。難波津新町は、昔より繁華の大湊にして、諸方に色町多かりしが、寛永の末、正保の始めつ方、一つ所に集められて、四筋の町となりぬ。即ち木村屋又二宿町瓢箪町これなり、佐渡島の勘右衛門町、四郎与兵衛町、金右衛門町、吉原町、これなり。其の外、六十六国に色里数多ありといへども、およそ傾城町と称する所のものは、あらずし、泉州堺の乳守ならびに高洲、和州の奈良に木辻、鳴川、伏見の鐘木、泥町、大津に柴屋町、越前に三国、敦賀の多町、西国筋におゐては、播磨の室、同国鞆野の姫路屋又左衛門町、備後の鞆、同じくただの海、備中の宮町、安芸の宮島の新町、下の関稻荷町、長崎の丸山町、此の外国々所々に遊女は多しといへども、皆色里などとこぼして、さまざまの品位しなぐらゐあまたなれども、土地の変はり目、風俗いろいろあれば、しばらく爰に略す。／湯女 楚の襄王、瘡を悩まれしに、巫山の神女、温泉をしつらひて沐せしより、温泉の湯女は始まりしとかや。其の外品々、爰に略す。／惣嫁 猪も臥す猪といへばやさしく、石の枕や苔筵、妹背をしむ初夜の鐘、重ね布団や釣り夜着の、はやきぬぎぬの別れを惜しむ樂しみも、ただ一心の中なれや。上は及ばぬ雲の上、下万民に至るまで、二柱の子々孫々、幾万歳の春ぞ樂しき。〔華紅葉〕寄妓恋 我が恋は思ひ廻しが風呂敷に包めどよ所にもるる線香へ異雪へ 歌読まば赤人とこそいふべきに素人なれば行けばふりつつへ佐谷へ 〔繪本御伽品鏡〕女郎屋 面白や数多太夫の道中は伊勢參宮の心地こそすれ 〔狂歌ますかがみ〕寄蠟燭遊女 夕部夕部流れを立てて蠟燭のしんきしんきの憂きつとめかな 寄雨惣嫁 雨ならで納屋の木の間に夕立ちてちつとの間づつ濡るる君哉 翁評云、艶によくいひ叶へて、扱々おもしろく候ひしかし。濡れ物とかやと被成間鋪や。昔の歌に立君とこの類を詠み申し候へども、爰には君いかが。 寄霞惣嫁 木隠れにそうかとばかりゆふまぐれ立てる霞の袖はあやなし 翁評云、よく含ませて古へは浜君と詠めり。 女郎 縞の衣服を着たり 色しとは衣裳に見えぬ淡路鳴神や知るらん波の濡れ者 女郎 淡路鳴の趣向 その淡路しま黄金の肌へならでしまより出でし箔の仏じや 〔誹諧職人尽〕立君・辻君 夕顔のおぼつかなくも化粧哉 丈国 立ちあかす君がけはいや秋の霜へ笠翁 立君や行くも帰るも渡り鳥へ蛙井 立君の小松にしのご時雨かな遊之

√ 立君のあはれを知る歎千鳥聞く△小田原 丹志√ 立君は何買ふて居る雪明かり△志友√ 立君と思へどうれし時雨の夜
 △和柔√ 立君の常の顔見るしぐれ哉△柳枝√ 立君のあやなく白し梅の花△一尺√ 立君も樂しみけらし雪一夜△文尺√
 臘月夜にしくものもなし柳原△可圭√ 立君の襟へしぐるる柳かな△斗南√ 提灯で見らるるや辻の女郎花△笙和√ 立君の
 夜寒も来たり居待月△柳隣√ 立君の夜も更けにけり橋の霜△寥和√ つじ君のやどり定めぬしぐれ哉△サハラ 米碩√ つ
 じ君の草に倦まれて冬の月△欣宇√ つじ君に涼みながらや隠れんば△路道√ 厨子君の朝も仏の別れかな△寥和√ 「職人
 尽狂歌合」遊女 年季をば数へて待ちしたはれ女も明るは厭ふ新月の色 左、いつかここを逃れてと心もとなく思へる遊び
 が心にも、月に一夜を惜しめるさま、おかし。……されど、勝は左とこそ定め待るべけれ。 / 遊女・くぐつ さはりなき
 月に心やうかれ女のつとめもうはの空に見るらん 旅人はとまれかくまれせめてただ一夜馴ればや月の桂男 左、なにごと
 なし。右、くぐつの情、さも侍りなん。勝つべくや。 / 遊女 うかれ女が寝ぬはもとより此の一夜つとめてめづる月の桂
 男 左、つとめての詞よろし。右、……勝つべくや。 / くぐつ 旅人の笠はよそ目にくぐつ女の心にとむる秋の夜の月……
 右、旅笠もまるき物ながら、それには心を入れて、月にのみ心をやれるさま、よろし。されど、左(役者)の狂言、ことにめ
 づらしければ、これに鬘肩のほめことばをば添へ侍りてん。 / くぐつ ともし火の油も月のさやけさにひとたらしなるく
 ぐつ女の闇 左、首尾おかしくや。但し、ひとたらしと申す詞こそ耳なれし心地して侍れ。右、……可為勝。 / 辻君 通
 ひ来る人のなき夜も辻君に莫塵を敷かす月の桂男 左、人待つとはなしに莫塵を敷きをるさま、限りなくめづらかに、おも
 しろき風情に侍り。……されど、独りる明かす辻君のさま、あはれ深ければ、勝と申すべし。 / 辻きみ 月影を隠せる雲
 の袖引きて桂男をめづる辻君 左、三の句、雲の袖引きてといへるあたり、今少しおぼつかなく確かならずは、ひとしほわか
 しかりぬべくや。右、……もつとも勝ちて侍るべし。 [江戸職人歌合] 九番 女郎・芸者 切り立ての花の盛りの春もあれ
 ど燈影影添ふ秋の夜の月 秋風よ吹きなほさなん宵の間の月に迎へのかかる浮雲 左右無「申旨」。判云、左、春秋の風情を尽
 くされたる、吉原の全盛並ぶものなし。右、月に迎へのかかる浮雲、興尽きて見ゆ。左尤為「勝」。いかにせん恋しゆかしと
 書く文も遊女の常と思ひ消つをば 三線のいとはれながら執着に心引かるる我ぞはかなき 右申云、いかにせんは、いかがせ
 んと詠むべしといふ人あり。いかが。左無「申旨」。判云、いかがせんといふ詞、身をいかがせむなど詠み果てたるは、力あり

て聞こゆるを、初句には、などやらむ、こちなきやうに聞きなさるる。いかにせんといふ発句の優なるに耳馴れつるゆゑにやあらむ。さばかり優なる詞を置きて、わざとこちなく、いかがせむと詠まんこと、いはれなし。此の詞、詠みかなへがたしなどもいふにや。詠みかなふる事のかたき安きは、作者の堪不堪なり。何の詞といふ事かはあるべき。右哥、執着になど、恐ろしきやうに侍りしを、さる謡ひ物の侍るぞとよ。心引かるるがやがて執着なれば、同心病にや。左は心深し。為レ勝。／

十番 夜鷹・船饅頭 晴るる夜は護持院原の土手の露敷き寝の床に月ぞ映れる さ小舟の奥なき寝屋を問ひ顔に咎の隙漏る宵の月影 右無二申旨一。左申云、問ひ顔、好ましからずや。判云、問ひ顔、何の好ましからぬ事か侍らん。映る月さへ濡るる顔なる、など秀哥にも多く侍るものをや。ただし、左歌をかしう侍る。問ひ顔、難には侍らずとも、右立ち及びがたし。そそり行く白手拭の頬被り我が思ふ人に似たる後ろ手 浮舟の浮きたる客のかねごとは永代橋の末の白波 右申云、左の歌、詞いやし。陳云、詞のほど、身のほどに合はせて侍る。右哥、左不二難申。判云、職人のつかうまつる歌、其の職によりたる事は、雅びたらずともいかがはせん。憚りあるべからず。大方の姿、たけ高く心深く、詞統き艶にも優にもつかうまつらんと構ふべき也。左哥、そそり行くといひ、白手拭といひ、又、頬被りといへる、其の職にことよりは侍れど、俗語重畳して、優にも艶にも侍らずや。又、そそり行く白手拭の頬被りは、切店なども侍れば、作者の職分確かならず。詞のほど、身のほどに合はせてと侍るは、いと口惜し。身こそ賤しからめ、哥詠まんにとりては、などか雲の上までも思ひ上がらざらむ。歌の風体も直ちに俊成、定家の卿を学びて、文明以後をこひねがふべからざるわざにこそ。右、姿よろし。勝ち侍るべし。〔今様職人尽歌合〕 船饅頭 崩れ橋崩れておちよ宮舟のみさを立てて綱引かずとも 右、崩れ橋、永久橋は阿千代がとも舟はつるところにて、みさを立つるなどもかしふり立てとも綱むやふに寄り所ありておもしろけれど、……三十二文の舟君も三百六十の目盛り（警目造）には勝の字を譲り給へかし。「あなかま、名をのみ聞く主たちよな」／月にこがれ夜ごとふかして戻ればや船饅頭の名は負ひにけん…… 饅頭に夜をふかすといへる事、聞きなれておくわしからず。／夜ごと見る月に老いけむ化粧せし顔も皺ある舟の浮かれ女／君ゆゑに憂き川竹の棹さして舟にこがるる身とはなりけり〔近世職人尽絵詞〕 町草者 昔、祇王祇女といへる白拍子ありしとき、家中大いに榮えて、従類眷属来たり集まる。色立つる者いかでかかほどの幸あるべきとて、かたへの遊人申しけるは、実には祇といふ文字はかみと読む也。われらも肖物あそびものにせんとて、祇一、祇二、祇三、

祇福、祇徳など名をつきたるこそおかしけれと、盛衰記にも見えたり。今もかかる類の者は、師たる者の名の一字を受け継ぐとらん。「今日は若君達の筵にて夜や更けぬらん」「よべも鶏とろの歌ふまで」

／ 惣嫁・夜鷹 都の惣嫁、東の夜鷹てふものは、古への立君に近し。宵の間はえりあまざる立君の五条わたりの月ひとり見る、と詠ませ給へる、あはれ深し。近比あはれに聞こえしは、葛飾の陌婦伝、塵塚の松。「もしもし、立ち寄らせ給へ」「立ち寄りて行かずかへ」「いざしばし遊び給へ」

〔略画職人尽〕着飾りし衣装も花の江戸仕立てつまはづれまで揃ふ歌ひ女／定めなき枕の山に夜毎夜毎涙の時雨降らす遊女〔難波職人歌合〕上十番左 芸子 宵々に足りゆく月の影見ても日柄の数のかからましかば 右の方人云、日柄といふ

ことなどは、今の世の習はしにこそあれ、けけしう歌などに詠むべき事とおぼえずなむ。左方答、日柄は日間の心成る由、谷川土清の和訓菜に見えたり。よしやはかなき事にせよ、女心に思ひ寄れるままを云ひ出だせるに、却りて趣は有るなり。

古今の序に、小町の歌を、悩める風情有りともいひ、又、強からぬは女の歌なればとも云ひて貫之の許せるも、此の心なるべし。……判に云、左の歌に日柄を詠めるも、右の歌に花を詠めるも、ともに打ち任せての論には当たりがたけれども、そは詠

み主にもよるべし。小町の古事を引き、桂の紅葉のことまでは、いほでも有るべきなり。……さて、歌はよしやあしや分かたべくもなければもちとす。／上十一番 揚屋 置屋 有明の月といへども山の端に隠るる影はさもあらばあれ 右の方人

云、こは何事をいへるにか。歌の表も心の裏も、むげに聞こえがたし。左方答、有明なるべき月も、山あればそれに隠るるによそへて、まらうどには一夜と定むる遊女も、くつわの方へは時を限りて傭のあはひを得る心を含めるなり。村雲に出て入

る月を露の間も早め早めて風は吹かなむ 左の方人云、時を限りて出せる遊女を、猶早め早めて迎ひを遣はし、いささかも時を貪らむとするむくつけき心とは聞こえたれども、月にとりては、雲に入ること急がれたる心、いといとかがといふべし。右方答、洩れ出づる月を急ぐにつきて、入るといふことも詞のあやに云へるにこそあれ、一首の心にかかはるべきにあらず。

判にいはいく、此のつがひは、左右ともに、心雅びたらず、されば、隠るる月を嘆くにはあらで、さもあらばあれと許し、又、入り出づる月とはいはで、入る影を願ふに似たるも、ことばのあやの調はざる故なり。勝負けあげつらふまでもなければ、又、持として有るべし。／下一番 太夫 惣嫁 言ひ馴れし恋しゆかしの言の葉はかけぬ方こそ命なりけれ 右の方人云、左

の歌、もとより情をひさぐ身なれば、心にもあらぬ艶なる詞を常々言ひ馴れたれども、其のまらうどたちの外に、命かけたる

恋人はありといふ心か。さては、いはゆる間夫なるべし。吞舟軒箕山の色道大鑑を見るに、難波四筋は、天の下の花郭におきても、二の町とは下らぬ所ぞかし。その太夫職にありながら、申しき遊び傀儡などのやうに、湯引屋男や包丁取りの類にうつつをぬかされたらむこと、聞きぐるしと云ふべし。左方答ふ、恋に上下かみしもの隔てなきことは、昔の人も既に云へるがごとくなる上に、然あながちなる所にこそ、せちなる心はあるなりけれ。堤中納言の物語にや有りけむ、かしこき姫宮の御身にて、掃除男を思し染みけるためしもあれば、よしやかたぬならんからに、思ひ初めたるが即ち恋なれば、是をいかがはせむ。川風に木の丸床の寒き夜はたれともなしに人ぞ恋しき。左の方人云、右の歌、川風といひ木の丸床といへれば、これは横堀あたりの木のあはひへ出る作者成るべし。古きわざ歌に、傘枕と云へる所こそ、此の難波には名高ければ、それをおきては、いささか心行かずやあるらん。はた、木の丸殿は、日本書紀、神樂歌などにも見えたれども、木の丸床と云へる例なく、古今集に、主知らぬ恋せらるはた、と云へる歌を、恋の部には入れられざるを思へば、此の歌は傍題にて、恋の歌には成り難かるべし。右方答、古きわざ歌ありとて、それになづみて所を嫌ふべきにあらず。又、木の限りをもて作れる殿を木の丸殿と云ひ、声の限りをもて作れる屋を蘆の丸屋と云へることく、木の限りなる床なれば、是を木の丸床といはんに、なでふ事かあらん。但し、誰ともなく恋しき心にては恋の部には入り難きよしの論は、いといと高きことにて、我ともがらの及ぶべきにあらず。判者の定めを待つべきなり。判に云、左の歌、右の方人の論はあたれりとも覚えず。恋をあきなふ身にはさこそは有るべけれ。是を誠の情といふべし。又、右の歌、左の方人の論もうべなひがたし。惣じて、右方に答へられたるがごとくなる上に、木の丸殿といふことのあるにすぎりて、木の丸床といはれたる所、耳新しけれ。又、主定まらぬの歌を、古今集に恋の部に入れられずとて、これをも恋の歌に成り難しといはれたるもかたくななり。かれは、結句にはたと云へるなど、其の外もおのづから恋の歌とは聞こえず。是は、定かに、人ぞ恋しきとあるが上に、歌主にもこそよれ、夜の寒きに侘びて、誰とはなしにまらうど恋しく思はれたる心ばへ、あはれなりと云ふべし。此のつがひは、左右ともにいとよく詠みかなへられたれば、持とやいはまし。

【本文】

三十番

よひのまはえりあまさるゝたち君の
五條わたりの月ひとりみる

おく山もおもひやるかなつまこふる
かせきかつしのまとの月見て

左右ともに、其道たしか也。しるて

勝負あるへくは、つまこふるかせき、より所

ある歎。可勝にや。

あちきなや名はたち君のいたつらに

ひとりねあかす夜半も有けり

三津川うはとやつるになりなまし

地こくかつしにのこるふるきみ

左、名はたち君、やさしけれども、右、三津河

のうは、よくよれり。猶以右為勝。

たち君

すは、御らん

せよ。

けしから

よひー〔類〕宵 たち君ー〔類〕立君

おく山ー〔類〕奥山 おもひやるー〔類〕思ひやる つまー〔類〕妻
まとー〔類〕窓 見てー〔類〕みて

歎ー〔忠〕〔類〕か

たち君ー〔類〕立きみ

ひとりねー〔類〕独ね 夜半ー〔類〕よは

のこるふるきみー〔類〕残るふる君

たち君ー〔類〕たちきみ 三津河ー〔類〕さうつかは

うはー〔類〕うはは

たち君ー〔忠〕三十番たち君

すや。

よく見
申さむ。

きよ水にて
いらせ給へ。

つし君

や、上らふ、
いらせ給へ。

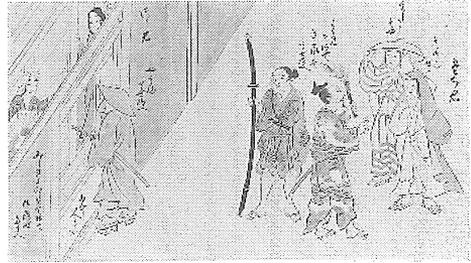
る中

人にて候。

みしりまいらせて候ぞ。

いらせ

たまへ。



よく見申さむー〔白〕〔忠〕能見申さん

きよ水ー〔白〕〔忠〕清水 にてー〔忠〕〔類〕まで

上らふー〔白〕〔忠〕〔類〕上臈

給へー〔白〕〔忠〕たまゑ

みしりー〔白〕〔忠〕見しり

いらせたまへー〔白〕〔忠〕入せ給へ〔類〕いらせ給へ

【語注】

◎立君は、路上に立って客を引く娼婦。本職人歌合、十番左、馬買はうの恋の歌に、「馬買はう博勞時の立君のよひあかつきに通ひ馴ればや」と、立君が詠まれている。

「つし君」は、従来「つじ君」と読んで、「辻君」と解されることが多かったが、「づし君」すなわち「辻子(図子)君」であることが、山本唯一『中世職人語彙の研究』、後藤紀彦「辻君と辻子君」(文学52-3)等によって明らかにされた。なお、つとに、『嬉遊笑覧』九には、「つし君は厨子君なるを、辻と心えたるは、街に立つもの故なり。つし君は家に居るものなり。同歌合(本職人歌合)に、妻こふるかせぎがづし、地獄がづしなどよめる、みな厨子てふ処の名なり。……今の局みせの類と見えたり」とある。辻子(図子)は、都市の過密化にともなうて、従来の広い敷地内に新たに開設された小路で、京都にもっとも多かった(高橋康夫「辻子―その発生と発展―」八「史学雑誌」86-6)。辻子君は、そのような人口密集地に店を構えた娼婦である。本職人歌合の絵でも、外娼である立君と対照的に、建物内であつて客を引く様子が描かれている。

『鶴岡放生会職人歌合』四番左に、遊女。

◎よひのまはえりあまさるゝたち君の「えりあます」は、「選り余す」。宵のうちは客が少なく、とかく選り好みされて、客が付かないのである。そういう立君のように、と下句に続く。

◎五條わたり 五條橋から清水坂にかけてのあたり。このあたりに古くより立君が多かったことは、『源威集』下に、文和四年二月十五日、河原に結集した北軍の軍勢を見るために集まった群衆のことに触れて、「洛中之事ナレバ、見物衆、五條橋ヲ棧敷トス。……当日終夜、清水坂ニ立君袖を烈ネテ、座等琵琶ヲ調ベ参ラセシニ、少々平家語ランズル鳥呼ノ者モ有リシ也」と記し、また、『看聞日記』応永二十九年正月十一日条に、「五條立城傾之体」をまねた、郷民の風流の松拍が伏見御所に参上したことが見えることなどから何うことができる。『犬筑波集』には、「五條わたりに立てる尼ごぜ夕顔の花の帽子を打ちかづき」という付合も見える。絵の中の言葉に、「清水にて入らせ給へ」とあるのも、このことに関連しよう。

◎月ひとりみる 選り余された立君のようにただ一人で月を見る、というのであるが、この歌全体としては、月の歌より、恋の歌とする方がふさわしいように思える。立君の歌だから、おのずから恋の歌めくことは仕方ないとしても、月の歌としては、やや問題があると思われる。

◎おく山もおもひやるかな 「奥山」は、単に奥深い山と見ることもできるが、ここは、例えば「世をそむくところとか聞く奥山は……(道命法師) (新古今集十七、雑中) に見るような、俗世を離れた世界としての奥山を意味すると考へるべきであろう。そのような奥山を思いやる、ないし、奥山住みをしたと思う。

◎つまこふるかせきかつし 「妻恋ふるかせぎ」から「かせぎが辻子」と続く。「かせぎ」は鹿の古称。ただし、散文でもそうだが、和歌の用例は限られていて、しかも、まれに用いられる場合も、「知りそめしかせぎが苑の萩の葉にひまなくおける無漏の朝露(後鳥羽院) (正治後度百首) のごとく、多くは、「かせぎが苑」(鹿野苑) のこと) という形で、仏教的世界を表わす。ここのような、妻を求め鹿(それ自体は古来しばしば詠まれてきた歌材であるが) を言う場合には、「妻恋ふるしかぞ鳴くなる女郎花おのが棲む野の花と知らずや(躬恒) (古今集四、秋歌上)」、「さをしかの妻なき恋を高砂の尾上の小松聞きも入れなん(源庶明) (後撰集十四、恋上) などのごとく、単に「しか」、または「さをしか」などと詠まれるのが普通である。ここは、「かせぎが辻子」を引き出すために、あえて異例の言葉づかいをしたのである。「かせぎが辻子」と、恋の歌に出てくる「地獄が辻子」とは、一休『狂雲集』の「嘆三王城姪坊(頌二首詩一首)の題辞、「洛下昔有(紅欄古洞兩処)。曰(地獄二、曰(加世一。又安衆坊之口、有(西洞院一。諺所(謂小路也。歌酒之客、過(此処一者、皆為(風流之清事一也。今街坊之間、十家四五娼樓也。淫風之盛、幾(乎(平)国」に見える、「加世」、「地獄」が、それぞれ該当しよう。また、「蓮如上人子守歌」として伝えられる室町時代の千秋万歳の歌にも、「六角町ニ売ル物(、鯉・鮒・鯛ト鱸ト……千蛸モ売ラウヨ、坊門町ニ売ル物、金鳥・山鳥、山鷓・田鳴ト、……白子鳥モ売ラウヨ、地獄ガ辻シカラ、加世ガツシヲ見渡シ、室町ヲ通レバ、売ラウ売ルマヒハ上臈様ノ御事カ、十七八カラ、廿ニ余テ、廿四五ノ上臈、茫々眉ニ薄化粧、齒先除トツテ鉄漿黒、立チニ立チテマシマス、我等ガ様ナルズツナシ、綿モ入ラヌ素素襖、セメヒボニ着ナイテ、小紋ノ十徳、上ニソツト着ソウテ、杉ナリノ笠ヲバ、深々ト着ソウテ、吹ケド吹カネド、尺八腰ニツイ差シ、上臈様ノ御ソバヲ、ヨシ(ト通タ、ソノ時ニ御上臈、袂ヲジツトドメテ、御トマリアレヤ殿トテ、鬢ハシホニ余ツタ、料足ノ一文、片割レモ持タネド、男ノ義理ナレバ、マヅ御名ヲ問フタ、コレナル上臈ノ、名ヲバナニト申シ候、初花ト申シ候、春ノ初メニ、ヨモシロシヤ

初花、コレナル御上臈ノ名ヲバナニト申シ候、アタラシ殿ト申シ候、アタラシ殿ト聞クヨリ、今出デト思ヒテ、ソト寄テミタレバ、御名ハアタラシ、御顔ハ古ウ御リアル、サモアレイカホドノ御出シゾ、例式サフラフ、例式ノ事トハ、一筋ノ御事カ、思ヒモ寄ラヌ事ナリ、ソレサモ候ズハ、法楽ノ御連哥、ノトハ五十五文ノ御事カ、思ヒモ寄ラヌ事カヤ、ソレサモ候ズハ、伊勢ノ御参リ、ノトハミワタリノ御事カヤ、思ヒモ寄ラヌ事ナリ、ソレサモ候ズハ、大名ノ御カド、ノトハ五文ノ事カヤ、思ヒモ寄ラヌ事ナリ、ソレサモ候ズハ、御寺様ノ御カド、ノトハ、三文ノ事カヤ、時々ノ商ヒニ悪シカルヲエラシメノト、地獄・加世両辻子が生き生きと歌われている。「加世」は本来、「かせ」または「かせい」と読むのであるが、訛って「かせぎ」とも呼ばれたのであろうか。両辻子の位置については、下坂守『京都庶民生活史』は、錦小路新町西にある炭座辻子が地獄辻子とも呼ばれたことなどから、四条新町あたりと推定し、山本唯一『中世職人語彙の研究』は、現新町上御霊前上ル東の岩栖院町が「賀世伊の辻子」、現今出川通七本松東の千本釈迦堂南の突抜町が「地ごくの辻子」と呼ばれたことから、両辻子をそれぞれの場所に比定した（「づし君」の項）。これに対して、後藤紀彦「辻君と辻子君」は両氏の説を否定し、前述の『狂雲集』の題辞に基づき、「安衆坊之口」、すなわち、左京六条と七条の間で、西洞院通りと交わるあたりに両辻子があったとする。しかし、『狂雲集』の題辞の「地獄」、「加世」両辻子と「安衆坊之口」とは別の場所と見るのが自然であらうし、一方、「蓮如上人子守歌」の「六角町ニ売ル物、……坊門町ニ売ル物、……地獄ガ辻シカラ、加世ガツシヲ見渡シ、室町ヲ通レバ……」と列挙された、「六角町」、「坊門町」（四条坊門町か。後藤紀彦『蓮如上人子守歌』の世界）△週刊朝日百科 日本歴史 中世I③▽は、七条坊門町か、とする。「室町」の地名からすれば、下坂氏の炭座辻子説がもっとも妥当ではないかと思われる。いずれにしても、両辻子が辻子君発祥の地であり、室町時代後期においてもなお盛んであったことが、上記の二資料から窺える。なお、この歌は、「奥山も思ひやるかな」という、仏教的ニュアンスの濃い上句を、「妻恋ふる」という恋の言葉で、まず受け、それに再び「かせぎ」という仏教臭の濃い言葉を続け、さらに三転して、「かせぎが辻子」という売笑窟に言及するというように、聖と俗の世界をなймаぜにして、滑稽な効果を狙っている。職人歌の典型と言ってよからう。

◎まとの月 窓から射す月影、ないし、窓から眺める月。

◎其道たしか也 「其の道」は、ここは、立君・辻子君の世界（四番語注「我道のさいかく、まことにきこえたり」の項参照）。それぞれの世界が明確に詠み込まれている、というのである。「たしかなり」は、「祝ひの方はたしかに侍れど」（弘徽殿女御歌合、九番判詞）、「題の心たしかなるべし」（六百番歌合、恋十、二番判詞）、「心詞たしかに詠みすゑられて侍るめれば」（千五百番歌合、千二百十一番判詞）など、歌合判詞にしばしば用いられる言葉。

◎より所ある歟 「寄り所」は、縁語、掛詞などの修辞。「立ち始むといへる、扇には寄り所なくや」（六百番歌合、夏下七番申状）、「このあまの苦屋も、磯近きと置かれずは白波の寄り所なく侍るべきにや。さしも侍らじものを……」（千五百番歌合、七百七十二番判詞）などの例がある。本職人歌合でも他に、「さにつら紅、尤も寄り所あり」（三十三番、紅粉解・鏡磨、恋、判詞）、「まことに作者の名に負ふ浦の月、寄り所ある歟」（四十四番、瓦焼・笠縫、月、判詞）、「奈良法師は得業になるゆへにや。されど、ただごうにこそ侍れ。とくはいま寄り所なきにや」（六十八番、山法師・奈良法師、恋、判詞）と用いられている。ここは、「妻恋ふる鹿」に「かせぎが辻子」を掛けた修辞が優れているというのである。

◎名はたち君のいたづらに 「名は立ち」から「立君の」と続き、さらに、その「立君の」を序詞的に用いて、「いたづらに」と続く。「いたづらに」は、「名は立ち」との対比、および、「独り寢明かす夜半も有りけり」への続きからすれば、伝統的和歌にしばしば用いられる場合と同じく、むなしく、の意であるが、「立君」との関係では、男女関係がみだらなさま、を掛けて見ると見るべきであろう。「いたづら」がそうした特殊な意味で用いられた例は、「孔子ニハ不随シテ、サテ死タレハ婦人カ二人マテ自殺シタヲ以テ見レハ、サラウニハ、文伯ハ孔子ノ様ナ長者ノ方ヘハ薄ク、女房方ヘハ厚カリケルソ、サルホトニ、イタツラモノト思テ不哭ソ」（史記抄、一一）、「カマイテ女房ヲチ、徒ラナ男ニハシ耽ラシムナ」（毛詩抄、三）、「此夏姫ハ二度天子ノ后ニナリ、三タヒ諸侯ノ夫人ニナツタソ。美人テハアルカ、イタツラ者テ、天下ヲ乱タ者ソ」（同、七）のごとく、中世末ごろから見られる。同じ「いたづら」という言葉の、雅語的な意味と俗語的な意味とを掛けた点が滑稽である。

◎ひとりねあかす 「独り寢明かす」という用法は管見に入らぬが、独り寝に一夜を明かす、の意であろう。

◎三津川はとやつるになりなまし 「三津川」は、明暦板本は「三津川」と表記する。亡者が冥土で渡るといふ川。

「姥」は、そのほとりにいて、亡者の着物を奪うとして恐れられた奪衣婆。ともに、下句の「地獄」との縁で出す。

ここは、強欲な客引き婆の比喩として用いたのであろう。三津川の姥のように、ついにはなってしまうのであろうか。

◎地こくかつし 「つまこふるかせきかつし」の項参照。

◎ふるきみ 「古君」で、年をとった遊女（辻子君）。客に相手にされなくなった嘆きを言うのであるが、この歌全体としては、恋の心が薄い。

◎三津河 明暦板本は「三津河」、類従本は「さうつかは」と表記する。

◎うは 類従本は「うはは」。

◎よくよれり 「寄る」は、縁語、掛詞などによって、言葉と言葉が関連すること。ここは、客引き婆を三津川の姥に譬えたこと、それが下句の「地獄が辻子」とよく照応していることなどを評価したのであろう。

◎立君の絵の中の会話については、その順序、話し手、意味等について、諸説がある。いま、『守貞漫稿』および

(1) 後藤紀彦「辻君と辻子君」〔文学〕52-3 一九八四年)

(2) 鈴木棠三『日本職人辞典』（東京堂出版 一九八五年）

(3) 後藤紀彦「立君・辻子君」〔週刊朝日百科 日本の歴史〕中世I-③ 一九八六年)

(4) 岩崎佳枝「職人歌合 中世の職人群像」〔平凡社選書 一九八七年）

の各論について整理すれば、次表のごとくである。

すは、御らんせよ	守貞漫稿	(1) 辻君と辻子君	(2) 日本職人辞典	(3) 立君・辻子君	(4) 職人歌合
立君	衣被きの立君	①衣被きの立君	④衣被きの立君	①衣被きの立君	

けしからずや	立君	市女笠の立君 (抗議)	③市女笠の立君 (抗議)	③市女笠の立君 「わるくはないでしょう」
よく見申さむ	男	①男	②男	②松明を持つ供人
きよ水にて(まで) いらせ給へ	男	④男 (応諾)	④従者↓男 「道草を喰わずに…」	④太刀を持つ供人↓立君 「清水までおいで願おう」

①〜④は、会話の順序。「立君」などは、話し手。「↓男」などは、話し相手。「および()」内は、会話の意味等。

◎すは、御らんせよ 衣被きの立君の言葉。さあ、私を御覧なさい。

◎けしからずや 市女笠の立君の言葉。「や」は反語の助詞で、まんざらでもないでしょう、と自分を売り込んでいるところか。なお、『伊京集』に「艶」とあり、もし「けしからず」に「艶」の意味があったとすれば、「や」は詠歎の助詞で、客のことを、色っぽい男だ、と褒めていることになろうか。

◎よく見申さむ 客の男の言葉。よく顔を見て判断しよう、というのである。

◎きよ水にていらせ給へ 「にて」は、忠寄本、類従本は「まで」。いずれにしても、意味が通じにくい。客の男の言葉か。女が気に入って、清水寺付近で宿を取ろうと応じているのであろうか。なお、『日本職人辞典』は、従者が、こんなところで道草を喰わずに早く清水まで行きましょと、主人を促す言葉、後藤紀彦「立君・辻子君」は、立君が男を誘う言葉であろうとする。岩崎佳枝『職人歌合 中世の職人群像』は、松明を持つ男と太刀を持つ男とは、ともに、ここには描かれていない清水寺塔頭にいる奈良法師の供人で、そのうちの太刀を持つ男が、法師に代わって「清水までおいで願おう」と、立君を促す言葉であろうとする。ただし、立君の絵を描きながら、あえて客の男を描かないというのは、やや不自然なように思われる。

◎辻子君の絵の中の会話について、立君の場合同様、諸説を整理すれば、次表のごとくである。

	守貞漫稿	(1) 辻君と辻子君	(2) 日本職人辞典	(4) 職人歌合
や、上らふ いらせ給へ る中人にて候 みしりまいらせて候ぞ いらせたまへ	男 桂包の辻子君 下げ髪の辻子君↓男 「旦那、…」	①男↓女達 ②下げ髪の女 ③男 ④桂包の女	①辻子君↓男 「殿方、…」	①辻子君↓男 (営業用の呼び方) ②男 ③古君

(3) 「立君・辻子君」は、(1)「辻君と辻子君」に同じ。

◎や、上らふ、いらせ給へ 辻子君の、客を誘う言葉であろう。「や」は、呼び掛けに用いる感動詞。「上臈」は、身の高い人をいうが、ここは、客に向かって「旦那」というほどの意か。後藤紀彦「辻君と辻子君」は、「上臈」は娼家の女を意味し、「や、上臈」は、一斉に顔をみせた女に狼狽した田舎武士(客)の言葉、「入らせ給へ」は右手の女(辻子君)の言葉とするが、「や、上臈」と「入らせ給へ」を別人の言葉とするのは、字配り(白石本、忠寄本では、「や上臈いらせ/たまゑ」という行割り)からして無理ではなからうか。なお、これらの言葉は、底本では、客の笠のあたりに書かれていて、全体として客の言葉とも取れる位置ではある。尊経閣本も同様。白石本、忠寄本は、さらに低い位置、客の腰より下に書かれ(しかも、白石本は、「つし君」という職名が画面の左端に書かれている)、これも客の言葉と解しうる位置である。これに対して、類従本の「や上臈/いらせ給へ」は、「つし君」という職名のすぐ左に書かれていて、辻子君の言葉であることが明解である。明暦板本の「や上らふ/いらせ給へ」も「つし君」という職名のすぐ下に書かれているが、明暦板本は他の諸本と図柄を異にするため、この位置からは、誰の言葉か判然としない。

◎ぬ中人にて候 客の言葉。遊び馴れていない田舎者で、気後れがする、というのであろう。もっとも、本当の田舎者はこういうことは言わないものである。実は、内の様子を窺っているのであらう。

◎みしりまいらせて候ぞ、いらせたまへ 客引きの女言葉。客の言葉を否定して、この辺りでよく見かける色男でしよう、とおだて、誘っているのである。

【絵】

立君の絵の、緋の衣を被き、白い小袖を着た女と、白い衣を被いた上から市女笠を被り、紅縞の小袖を着た女は、ともに立君であろう。二人が履いているのは板金剛か（二十一番語注「いたこんかう」の項参照）。客の男は、烏帽子、直垂袴姿で、腰刀を差し、草鞋を履く。左手に松明を持ち、立君の顔を見ている。右手は立君を指しているように見えるが、画面の手前の法（男の右方向）を指しているのかも知れない。そうだとすれば、「きよ水にていらせ給へ」という言葉と関連するか。大太刀を持って控えているのは、客の男の供であらう。無帽で、髪を束ね、直垂を着、袴の股立ちを取る。腰刀を差し、草履を履く。明暦板本は、客の男の供を描かない。これは、立君、辻子君両図を、縦長の画面に収めるための省略である。また、白石本、明暦板本、類従本は、着物の柄などに、それぞれ小異がある。

建物の中、戸口の右手に、垂髪で、緋の小袖を着た辻子君、その奥に衣を被いた女の顔が覗く。この女も辻子君か。戸口の左手に、桂巻をし、小袖を着た客引きらしい女が手招きをしている。建物の外に、塗笠を被り、十徳を着て、腰刀を差し、足駄を履いた客の男が、右袖で顔を隠しながら、様子を窺う体。笠を被り十徳を着た姿は、上杉本『洛中洛外図屏風』の畠山辻子（左隻第四扇）や、町田本『洛中洛外図屏風』のほぼ同じ場所（左隻第三扇）にも見られる。建物は吹抜屋台に描く。白石本、忠寄本、類従本は、着物の柄などに、それぞれ小異がある。明暦板本は、他の諸本と図柄を異にし、建物の戸口左から辻子君が覗き、建物の外に客の男、その左に客引きらしい女を描く。これも、縦長の画面に収めるための省略である。

【参考】

- 一つの涙を袖にとむらん
忘れずよ宿の夕の浮かれ妻
- 荻かれぬ風も宿をや尋ぬらん
そよたが待つぞ旅の遊女
- 佗び人は我と定めん宿なくて
夜毎につまの替はる遊女
- 憂き事も今ぞ始めの旅枕
別れ多かるこれや遊女
- 行く未明くる衣々の道
たはれめは藤や桜の陰に寝て
- 室の戸閉づる夜な夜なの霜
うかれめは誰にか契り結ぶらん
- 又さしかへる舟の人影
室君のかりそめぶしは定めなや
- 身より外には誰をうらみん
うかれ女の行く舟したふ室の海
- うかれ女や棹とる舟子哥うたひ
うらかなしきはかりそめの中
- 色なる心さぞな移ろふ
たれとかも秋の野上のをかれ妻

〳〵救済〴〵

(紫野千句、五)

〳〵成阿〴〵

(同、六)

〳〵日晟〴〵

(初瀬千句、二)

〳〵性盛〴〵

(同、十)

〳〵宗砌〴〵

(顯証院会千句、二)

〳〵時述〴〵

(同、五)

〳〵専順〴〵

(宝徳四年千句、八)

(異体千句、四)

(同、八)

(同、九)

○ 旅立つをとまりてしたふ夜は長し

月は入江の室の友舟

〈経泰〉

(美濃千句、一)

○ とめても袖の濡るる舟人

たはれ女や一夜をあだに急ぐらん

〈宗祇〉

(同、七)

○ 心にとめぬ法の悲しさ

一夜ぬる室の友舟漕ぎ離れ

〈専順〉

(同、九)

○ 泪はしるき君ぞつれなき

別れうき江口の舟の楫隠せ

〈盛長〉

(熊野千句、八)

○ 契らぬ人を頼む夕暮

舟をのみ江口の宿の便りにて

〈泰諷〉

(三嶋千句、六)

○ 心づくしに遠ざかる舟

かひなしや馴れし一夜のうかれ妻

〈泰諷〉

(葉守千句、十)

○ 塩辛声で細歌ひけり

傾城の宿には猫も犬もあり

〈泰諷〉

(竹馬狂吟集、恋)

○ 五条わたりに立てる「尼」ごぜ

夕顔の花の帽子を打ちかづき

〈泰諷〉

(犬つくば集)

○ げにやもとより定めなき世といひながら、憂き節しげき河竹の、流れの身こそ悲しけれ

(謡曲、班女)

○ 紅花の春の朝、紅錦繡の山粧ひをなすと見えしも、夕の風に誘はれ紅葉の秋の夕、黄纈纈の林、色を含むといへども朝の霜にうつろふ、松風羅月に言葉をかはず賓客も、去つて来たる事なし、翠帳紅閨に、枕をならべし妹背もいつの間にかは隔つらん、凡そ心なき草木、情ある人倫、いづれあはれを遁るべき

(謡曲、江口)

○ 歌へや歌へうたかたの、あはれ昔の恋しさを、今も遊女の舟遊び、世を渡る一節を、歌ひていざや遊ばん

○地白の帷子は宵に着べいものやれ、傾城^{そうとめ}早乙女は宵にはれをやるふや、地白帷子傾城こはめに迷ふた、面白^{おもしろ}いぞや
傾城こはめどはないて

(閑吟集)

(田植草紙)